

## 1. はじめに

CCC (カルチャ・コンビニエンス・クラブ) の運営による図書館が、武雄市 (佐賀県)、海老名市 (神奈川県)、につづいて、2016年3月、多賀城市 (宮城県) に開館し、さらに、高梁市 (岡山県) でも、2017年2月に、開館した。多数の来館者が殺到していることで話題となったが、その選書や運営についての問題点も指摘されている。1)

一方、日本図書館協会公共図書館部会は「自治体総合計画等における図書館政策の位置づけ」について、各自治体の中央図書館に対して実施したアンケートの結果を発表した。

2) 「回答のあった 1,049 自治体のうち、まちづくりや地域振興に役立つ目的で事業を行っている」と答えた図書館は、497 自治体あり、事業として 597 事業の回答があった」とされている。この調査については、新聞紙上で、「農家との交流会や子育て中の女性の就業支援、ビジネス相談など多彩な取り組みの実態も判明。政府が『地方創生』を掲げる中、図書館を街づくりの核に据えて地域活性化を目指す自治体の広がりが増え、文化基盤の整備が地域活性化につながる」との認識の浸透が背景にある」3)などと報じられた。

また、「ぎょうせい」が刊行する「これからの地方自治を作る実務情報誌」というサブタイトルが附された、月刊『ガバナンス』には、「特集 公共図書館のミライ」が掲載された。

4) 記事の執筆者は、これまで、図書館と地方創生に関する案件について、実際にかかわりをもったり、研究的な側面からアプローチしてきた人々であり、地方行政の専門誌で公共図書館が特集されるということは、そうした現場で、図書館に対する関心が一定程度、存在していることを示しているといえよう。

実際の図書館施設に関しても、注目すべき建築事例が、次々に建設されている。中でも、実績のある建築設計家に関与した例として、十和田市民図書館：安藤忠雄、みんなのもりぎふメディアコスモス・岐阜市立中央図書館：伊東豊雄、TOYAMA キラリ・富山市立図書館本館：隈研吾、なかまちテラス・小平市立仲町図書館：妹島和世、などは、図書館界以外でも話題となった。また、これまで図書館を手がけてきた設計事務所による施設としては、八千代市立中央図書館・岡田新一、江東区立豊洲図書館・日建設計、北見市立中央図書館・久米、などの例がある。5)

### 注

1)たとえば、高梁市図書館について、以下の記事では、「市教委社会教育課によると初日は4590人が訪れ、15日現在で来館者数は3万2354人、貸出冊数は1万2175冊となっている」ことが報じられている。

「高梁市図書館 もう旧館1年分来館 3万人超え、年間目標上回る勢い」『山陽新聞』2017.2.16

(<http://www.sanyonews.jp/article/489057>)

なお、メディアで批判的に取り上げた例の代表的なものとして、以下の記事がある。

「武雄市『TSUTAYA』委託が最悪例 すさんでいく『公共図書館』『選択』2015.2、pp.104-105

田井郁久夫「虚像の民営化『ツタヤ図書館』 公立図書館の役割とは」『世界』2015.12、pp.196-205

2) (<http://www.jla.or.jp/divisions/koukyo/tabid/272/Default.aspx>)

3) 「図書館を街づくりの核に 447 自治体、地域活性化促す」『東京新聞』2017.1.9

(<http://www.tokyo-np.co.jp/s/article/2017010901001296.html>)

調査結果に対する反響については、日本図書館協会のメールマガジンでも「まちづくりの核となる図書館事業に注目」として、以下のように紹介された。

日本図書館協会公共図書館部会が実施した「自治体総合計画等における図書館政策の位置づけ」についてのアンケート調査が反響を呼んでいる。全国紙の日本経済新聞、産経新聞が取り上げたほか、共同通信の配信をもとに、次の地方紙がこのことについて記事にしている。

東奥新報、デーリー東北、秋田魁新報、岩手日報、河北新報、福島民報、上毛新聞、埼玉新聞、神奈川新聞、北日本新聞、山梨日日新聞、神戸新聞、日本海新聞、山陰中央新報、四国新聞、大分合同新聞

記事は、調査の概要、全国的な事例の紹介だけでなく、それぞれの地方紙の地域内の公立図書館の取り組みを取り上げていたり、図書館が近年、地域活性化の流れで注目されるようになった背景についての記事もあわせて掲載するなど、興味を惹く内容となっている。

今後も、社説などで図書館と地域振興を論ずる予定の全国紙があり、また、日本図書館協会の機関誌「図書館雑誌」でも同様のテーマを取り上げる予定となっている。

『JLA メールマガジン』第 834 号、2017.2.1

4)月刊『ガバナンス』ぎょうせい、2016.8

柳与志夫「公共図書館の役割と可能性」『ガバナンス』2016.8、pp.14-16

糸賀雅児「まちづくりを支える図書館」『ガバナンス』2016.8、pp.17-19

この記事では、「地方自治体の現実的要因としては、図書館の『集客力』と『認知度』の高さが注目されたのであろう」として、『『まちづくり』を意識して構想された』施設の事例に、武蔵野市（東京都）、舟橋村（富山県）、滝川市（北海道）、をあげている。

塚田洋「政策づくりに“効く”図書館」『ガバナンス』2016.8、pp.20-22

佐藤達雄「民間活用のポイントと課題」『ガバナンス』2016.8、pp.23-25

猪谷千香「TUTAYA 図書館が投げかけた波紋」『ガバナンス』2016.8、pp.26-28

南学「公共施設等総合管理計画と図書館機能の再構成」『ガバナンス』2016.8、pp.29-31

倉田哲郎「『図書館改革のススメ』—私たちの図書館戦争」『ガバナンス』2016.8、pp.32-34

《取材レポート》公共図書館が描くわがまちのミライ

「伊万里をつくり、市民とともにそだつ、市民の図書館 伊万里市民図書館（佐賀県）」  
『ガバナンス』2016.8、pp.35-37

「図書館機能を核に人と情報が行き交い、つながる、知的創造の『場』 武蔵野プレイス（東京都武蔵野市）『ガバナンス』2016.8、pp.37-40

「地域の歴史や自然を活用し図書館の可能性を広げる 伊那市立図書館（長野県）『ガバナンス』2016.8、pp.41-43

5)たとえば、2チームから提案された、新国立競技場の設計・施工案は、隈研吾、伊東豊雄の両者が、それぞれのチームに名を連ねていた。

「新国立、工期重視でA案 デザインなど優勢のB案破る」『朝日新聞』2015.12.23（朝刊）、p.1

また、安藤忠雄、妹島和世（西沢立衛とパートナー受賞）、伊東豊雄、は、「『建築界のノーベル賞』と形容されることもある」（weblio 辞書 <http://www.weblio.jp/>）「プリツカー賞」を受賞している。

こうした図書館施設の事例については、下記の発表で、詳しく紹介された。

植松貞夫「公共図書館の建築：近年の動向」三田図書館情報学会・第168回月例会、2016.9.10、慶應義塾大学三田キャンパス

## 2. フィクションの作品と図書館—2016

運営面や施設・設備のあり方も含めて、図書館の多様化が進行している中で、2016年には、フィクションの作品でも、図書館や図書館員が登場する事例が、複数、発表されている。

映像の分野では、映画のストーリーに図書館が深く関与する『海すずめ』が、2016年7月に公開された。「赤松雀は、市立図書館“自転車課”（自転車で図書を配布する）で働いている」1)「自転車で街や島を駆け巡り、市民に本を届けている」赤松雀は「文学賞を受賞して小説家デビューをしたという過去があった」が「スランプとなり、2冊目の執筆を投げ出して地元へ逃げ帰ってきた」2)というストーリーで、映画の公式サイトでは、宇和島市立中央図書館が、「雀の働く図書館。主な撮影場所」とされている。3)また、架空の存在である“自転車課”の業務として、貸出・返却以外に「利用者から質問や相談を受け付けたり、文献探しのお手伝いをするレファレンスサービスも実施している」とある。4)

2016年8月に公開され、多くの観客動員を記録した、映画『君の名は。』では、ストーリーにゆかりのある場所を実際に訪問する「聖地巡礼」が注目を集めた。その巡礼先ひとつである飛騨市図書館では、カウンターで許可申請を行えば、館内で写真撮影可能、という対応をしたことで、話題となった。5)

2016年12月に公開された、映画『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』では、オフィシャルサイトの「オススメデートスポット」に図書館がとりあげられており、「ぼくは明日、昨日のきみと図書館でデートする」というキャプションのはいったポスターが公開され、「たまには、図書館で読書デートや勉強デートなんてのもいかが？」「図書館は暖かい環境と沢山の本を用意してみなさんをお待ちしています！」というメッセージが附された。

6)

さらに、2017年2月には、「奈良県の葛城地域に実際にある図書館を舞台にした物語」である、映画『天使のいる図書館』が公開された。この映画を紹介しているwebページでは、「葛城地域にある図書館に新しく女性司書が赴任した。大学を卒業したばかりで、初めての職場環境と仕事にとまどいながら日々を過ごしていた」「利用者の探し物を手伝うことになったことから」「地域の歴史や地元の良さを再発見していく」7)「東京の大学を出て、地元の図書館に就職し新人司書として働く吉井さくらは、レファレンスサービスという慣れない仕事にとまどいながら日々を過ごしていた。理科系の女の子であるさくらは、合理的な考え方と、主観で物事を語ることを嫌う性格が災いし、同僚や上司とうまく馴染めずにいる」「レファレンスサービスとは…図書館利用者が学習・研究・調査を目的として必要な情報・資料などを求めた際に、図書館員が情報そのものあるいは必要とされる資料を検索・提供・回答することによってこれを助ける業務である」8)などと、紹介されている。

テレビの連続ドラマでは、図書館とも関係の深い、出版業界を扱ったものが放映された。『重版出来』9)が、2016年4月～6月、TBS系列で、『地味にスゴイ!校閲ガール・河野悦子』10)が、2016年10月～12月、日本テレビ系列で放映された。

注

1) (<http://umisuzume.com/introduction.html>)

2) (<http://umisuzume.com/story.html>)

3) (<http://umisuzume.com/map.html>)

4) ([http://umisuzume.com/bicycle\\_section.html](http://umisuzume.com/bicycle_section.html))

このページ「宇和島市立図書館 自転車課 徹底解剖」では、その概要、装備、業務内容などについて説明されているが、「“自転車課”は、本映画のフィクションです」と記載されている。

5)「飛騨市図書館内の写真撮影をする場合は、カウンターで許可を得てください」「撮影をされる際には、一般利用者の顔が映らないようご配慮ください」との記述が、下記にある。

『飛騨市公式観光サイト 飛騨の旅』

(<http://www.hida-kankou.jp/model/1000000603/>)

6) ([http://www.bokuasu-movie.com/date\\_campaign/](http://www.bokuasu-movie.com/date_campaign/))

コラボビジュアル作成施設として「日本図書館協会(全国の国公立図書館)」があげられている。

(<http://www.bokuasu-movie.com/news.html>)

7) (<http://www.toshokan-movie.com>)

8) (<http://www.toshokan-movie.com/story/>)

9)原作は、『月刊スピリッツ』(小学館)連載の下記のコミック作品

松田奈緒子『重版出来』小学館

2017年2月の時点で、1～8、まで刊行されている。

10)原作は下記の小説。2017.2時点で、3点刊行されている。

宮木あや子『校閲ガール』KADOKAWA、2014.3

宮木あや子『校閲ガール ア・ラ・モード』KADOKAWA、2015.12

宮木あや子『校閲ガール トルネード』KADOKAWA、2016.6

### 3. 図書館の登場する小説—2016

小説の中で、図書館や図書館員が扱われているケースも一定数、存在すると思われるが、今回は、各紙誌の書評や著者インタビューで取り上げられた、3作品について検討した。

#### 3-1. 高原英理『不機嫌な姫とブルックナー団』講談社 1)

高原英理は、1959年、三重県生まれ。小説家、文芸評論家。立教大学文学部卒業、東京工業大学大学院社会理工学研究科博士課程修了（価値システム専攻）。1985年、幻想文学新人賞、1996年、群像新人文学賞評論部門優秀作、を受賞している。2)

この小説のメインキャラクターである女性は、「図書館に勤める女性・代々木ゆたき」3)、「契約で働く図書館司書のこのアラサー女子」4)、「語り手の女性——後に図書館の非正規職員だとわかる——」5)などと、各書評で紹介されている。これらの書評の中では、作曲家・ブルックナーや、音楽に関する言及はあるが、代々木ゆたきの職場である図書館については、特にふれられてはいない。

#### ○プロフィール

図書館に勤務するこの女性は「三十二歳」(p.12)で、「地方出身」「大学からは、都内、アパートで一人暮らし。そのまま都内にとどまっている」「そこそこ容姿もそう悪くないつもり」(p.37)「本当はセンスに自信もないし、おしゃれでもない」「そんな若くもない」(p.38)とされている。なお、「区立図書館の非常勤職員」(p.62)という設定で、「火曜日は図書館の休館日」(p.150)とあるが、現実には、東京23区内の区立図書館で、火曜休館のところは、現在、ほとんどない。6)

#### ○司書資格と図書館の職員体制

「英文学科に入ったのは翻訳がしたかったからだ。結局、才能がないと思って諦めてしまった。それでも好きな本のそばにいたくて、司書の資格が取れたのはよかったものの、正式採用なんて宝くじ級に稀だから、今も区立図書館の非常勤職員をしている。基本、残業がないのは助かる」(p.62)とあり、大学時代に、自分の関心のあった作家の長篇小説の翻訳に取り組んでいたが、有名な翻訳家の訳が先に出版されてしまい、翻訳家になる夢を諦めた。「それでも好きな本の紹介をしたいと思ったから非正規の図書館の採用試験に応募して、どうにか合格してこうしている」(p.117)という状況にある。

「わたしの勤める図書館は正規職員が三人しかいなくて、あとは非正規のアルバイトが五人。アルバイトは基本一年ごとの契約更新なのだが、これまで特に契約を打ち切られる人はいなかった」(p.63)とされている。こうした状況は、現在でも、実態として存在していると思われるが、外部に運営を委託するケースなどでは、数年での雇い止めが、増加している。7)この女性も、ストーリーの後半では、「この仕事もこのまま続けても正規職員にはなれそうもないし、そろそろ、次を考えないとなあ」(p.112)と感じている。

図書館業務の実態については、「一月末の三日間は館内整理が続いた。司書は知的な仕事

と思われているかも知れないけれど、八割は肉体労働だ。この時期は特に、重い本を十冊以上も片手で持って、何十架とある書架にさしこんでいくので、何時間も続くとかかりきつい。高い所より低いところにしゃがんで入れるのが、もっときつい。おかげでこの三日間はなにもできず、帰ったらすぐ風呂に入って寝て、の繰り返しだった」(p.88) など、利用者からはみえにくい業務内容にもふれている。

#### ○利用者とのトラブル

「毎回不気味なことを言ってからむ(主におっさんの)クレーム客が厭だ」(p.62)「本が読まれなくなったと言われてはいるけれども、近年は定年退職した人がどっと増えたこともあって図書館利用者は増加している。それはありがたいのだが、仮に来る人が増えると仕事が増えるばかりでなくて、イヤなことも増える」(p.63)とあるように、現実の図書館での実態をふまえた展開になっている。8)

「六十過ぎくらいの老人」が「独り言をぶつぶつ」と言ったり「周りに教え諭すように得々と語っていた」(p.63)が、他の利用者からむので、カウンターから出て注意すると、大声で凄み、「相手はいきなり手を伸ばしてきて、首を絞められ」(p.64)、先輩の男性職員が飛んできて、警察に通報し、この老人は連行される。その後、「館長から長い注意を受けた」「今回は相手の行動が常軌を逸していたからかえって対処できたが、普通ああいうときはどこまでも下手に出るべきである、言い返すなどもってのほか、通報も望ましくない、どこまでも穏便に、という話なのだが、納得できない。できないけれども、大ごとになった責任はあるように思えたし、館長の立場も考えて、申し訳なさそうにしていた」「またこういうことがあったとき、いったいどうするのが正解なのか。これまでクレームに対しては館長の指示通り、できるだけ丁寧に対応してきたのだが、あんな暴力男に『すみませんでした』なんて言えるかなあ、ブチ切れそうだなあ。と帰ってきてからどっと気分が落ち込んだ」(p.65)とあるように、利用者とのトラブルを避けるための配慮が必要になっているシーンが出てくる。こうした事態は、他の小説でも取り上げられており、たとえば、現実に図書館に勤務している作者によって書かれた、第59回江戸川乱歩賞受賞作『襲名犯』では、電話や館内で、直接、職員に、クレームをつける利用者の姿が、詳細に描かれている。9)

#### ○資料選択と図書館予算

この女性図書館職員は「ベストセラーの貸し出し希望ばかり何十人待ち、という最近の現状も残念だ。ただ、子供と学生に『いい本』を教えてあげることができるのは嬉しいし、何人かいる、読書好きの女の子たちと話すのが楽しみだった」(pp.62-63)と思っていたが、「館内整理から二週間後、職員全員出席の会議の席で、館長から通達があった。『最近、他館との比較貸出率が大きく下がっているの、利用者希望の書籍を三割多く購入することにしました』『これまで頼んでいた選書の部分を、それにまわすことにします』』と言われ、「衝撃だった。選書というのは新たな購入書の決定のことで、普通は正規職員がやる。けれど、わたしは多少英文学に詳しいということで、英語の翻訳書担当を一部任されていたのだった。といっても半年に二十冊程度だけだ」「もともと非正規のアルバイトに選書の

ような重要な仕事を頼むのはイレギュラーなことなのだけれども、図書館はどこでも内々の判断で運営していたりするので、これまで問題はなかった」「館長の言う貸出率というのは、その図書館で貸し出された冊数を、その館のカバーする地域の人口で割ったものを言う。そんなのただの統計で、借りる人が多かろうが少なかろうが、図書館の役割はその地域の知的情報蓄積所・発信所であればいいのだ。というようにいくらでも批判はできるのだが、これが数値として一番わかりやすいという理由で役所は予算を組むときの根拠にしている。毎年、この貸出率の多い少ないの比較で、区立の各館への予算配分が決まってしまうのだ」(pp.110-111) と感じる。

この図書館の利用状況について「現在、図書館の利用者の大半は、『今よく売れてる本をタダで読みたい』という人たちだ。そうすると、より貸出冊数を多くするためには、ベストセラー本を何十冊も購入することになる。それで本当に貴重な、すぐ絶版になってよめなくなりそうな名著を入れる余裕がなくなってしまう。特に最近は翻訳ものが読まれなくなって、それではいけないと思うからいろいろ懸命にレファレンスに励んでいたのに、このままでは半年後にブックオフの百円コーナーに並ぶ種類の本ばかりに購入予算を使わなければならないのだ」(p.112)「それでも好きな本の紹介をしてみたいと思ったから非正規の図書館の採用試験に応募して、どうにか合格してこうしている」「その紹介も、これからはあんまりできなくなるんだ」(p.117) 10)と考えている。この小説でも「レファレンス」という言葉が出てきているが、その内容は、前後の描写から、この女性が関心を持っている、翻訳小説の紹介をすることであるように思われる。

注

1)高原英理『不機嫌な姫とブルックナー団』講談社 2016.8

2)高原英理は、『不機嫌な姫とブルックナー団』の奥付で、「1959年、三重県生まれ。小説家、文芸評論家。立教大学文学部卒業。東京工業大学大学院社会理工学研究科博士課程修了(価値システム専攻)。1985年、小説「少女のための塵殺作法」で幻想文学新人賞受賞(選考委員は澁澤龍彦・中井英夫)、1996年、三島由紀夫と江戸川乱歩を論じた評論「語りの事故現場」で群像新人文芸賞評論部門優秀作を受賞」とされている。

3)「図書館に勤める女性・代々木ゆたき」は「コンサート会場で『ブルックナー団』を名乗るオタクな男性3人組と知り合う」「仕事で行き詰っていたゆたきの心も、この音楽家やオタクたちとの交流を通し、少しずつほぐれていく」と紹介されている。

「Book 高原英理『不機嫌な姫とブルックナー団』講談社」『anan (アンアン)』2016.11.16、No.2028、p.115

4)「書評 文芸評論家・伊東氏貴が読む 『不機嫌な姫とブルックナー団』高原英理著」『産経ニュース』2016.10.9

(<http://www.sankei.com/life/print/161009/lif1610090027-c.html>)

5)『『幻に殉ずる』姿勢—イロニーによって際立つ、ブルックナーの崇高さを理解する意味評者：岡和田晃 『不機嫌な姫とブルックナー団』高原英理著』『図書新聞』2016.11.26、p.1

6)『日本の図書館 統計と名簿 2015』pp.361-367、で、東京 23 区の、区立図書館の開館状況をみると、200 館以上ある区立図書館の中で、火曜日が休館日に設定されているのは、3 館（渋谷区立代々木、豊島区立駒込、豊島区立上池袋）である。

7)たとえば、以下の記事では、公共図書館勤務と「雇い止め」の実情を紹介している。

「月収 13 万円、37 歳女性を苦しめる『官製貧困』公営図書館の嘱託職員は 5 年で“雇い止め”に」『東洋経済 ON LINE』2016.9.8

(<http://toyokeizai.net/articles/-/134801>)

東京 23 区では、司書職制度は存在しないので、正規職員では「司書」という職名は存在せず、「司書」有資格者を対象とした正規職員の採用試験は実施されていない。

8)たとえば、「昼まえに図書館に行くと、前期と後期の別なく男性高齢者の姿がやけに目につく。私もふくめて、たぶん、その多くは定年退職者」という指摘がなされている。

津野海太郎「退職年金老人、図書館に行く 百歳までの読書術」『本の雑誌』2012.12、No.354、pp.70-73

9)竹吉優輔『襲名犯』講談社、2013.8 第 59 回江戸川乱歩賞受賞

竹吉優輔は、牛久市立図書館に勤務している。

「牛久市職員の作家の竹吉優輔さん 市『図書館名誉館長』を授与」『東京新聞』【茨城】2016.11.21

(<http://www.tokyo-np.co.jp/article/ibaraki/list/201611/CK2016112102000185.html>)

『襲名犯』には、「暴言を吐かれた」と電話をかけてくる男性 (p.28)、「子供の放置は困る」と注意され激昂する母親 (pp.56-57)、職員の服装や「本の質」にクレームをいう老女 (pp.159-160) などが、登場する。

10)web 上では「予算が貸出率に応じて分配されている」図書館で、職員が「貸し出し履歴を偽装」した例が話題にとりあげられている。

(<http://gigazine.net/news/20170113-librarians-create-fake-reader/>)

### 3-2. 綿矢りさ『手のひらの京』新潮社 1)

綿矢りさ、は「1984 (昭和 59) 年京都府生まれ。2001 (平成 13) 年『インストール』で文藝賞受賞。早稲田大学在学中の 2004 年『蹴りたい背中』で芥川賞受賞。2012 年『かわいそうだね』で大江健三郎賞 2)を受賞している。

『てのひらの京』で、図書館に勤務する、長女綾香については、「おっとりした長女・綾香は 31 歳、次第に結婚への焦りをつのらせる」3)「結婚を焦る奥手な長女・綾香」4)「恋愛に臆病な 31 歳の長女綾香」5)などと紹介されている。

関西を舞台にした姉妹の物語ということで、「京都を舞台にした三姉妹の物語で、まるで現代版『細雪』のようだと言われることも多い本作。実際に、綿谷さんはこの小説を書く 1-2 年ほど前に『細雪』を改めて読んで、いいなあ、と思われたとか」6)のように、綿矢版『細雪』といわれているが、姉妹をヒロインに据えた作品で、図書館勤務の人物が含まれているものとしては、四姉妹の三女・滝子が図書館勤務という設定の、向田邦子『阿修羅のご

とく』があげられる。もっとも、図書館の描かれ方については、時代的な状況の違いが反映されている。7)

#### ○プロフィール

「図書館の職員である綾香は週休二日制で、休館日の火曜日はかならず休みだ。恋人のいない綾香は休日は大体一人か友達といっしょに、気ままに過ごしている」(p.22) 6)とあり、この小説の舞台が京都市であることは、ストーリーに登場する地名などから明らかだが、綾香が勤務する図書館については、どのような図書館か、具体的には示されない。京都市内には、京都府立図書館や大学図書館・学校図書館も多数あるが、館内の描写や利用者(高齢者、小さな子供連れの母親、など)、「休館日の火曜日」(p.22)という設定から、京都市図書館のどこかの館が想定されていると思われる(京都市図書館は火曜日が休館日、京都府立図書館は月曜日が休館日)。8)図書館での業務については、綾香が、次女の羽依に、「『私かって図書館みたいな呑気な職場やからこそ長く続いてるけど、羽依ちゃんの会社みたいなバリバリの大企業やったら無理やったと思うわ。優秀な社員同士の競争もあるやろしねえ』」(p.93)と語っている場面がある。

#### ○図書館での業務と図書館で働き続けることへの不安

館内での業務内容と綾香の心理的側面については「開け放しの図書館の窓から、裏の幼稚園の園児の歌声が響いてくる。返却された本を所定の位置に戻していた綾香は一瞬めまいがしたが、すぐ立ち直って膝を折り、低い位置の棚に本を差した。図書館には開館時間と同時に利用客がやってくる。平日の午前中は新聞目当てにやってくる高齢者の数が多いが、ほかにも小さな子ども連れの母親や中年の人たちもよく見かける。本を戻し終わり受付に帰るまでに、綾香は走っていた子どもに注意し、雑にしまわれて皺の寄っている新聞紙を元に戻した。本当は閲覧席でなにか食べながら週刊誌を読んでいる高齢者にも館内は飲食禁止ですと注意したかったが、ときどき気難しい老人がいて逆にこちらが叱られたりするの、気づかないふりをして通り過ぎる。子どものマナー違反のほうなんの逡巡もなく注意できる分、よっぽど気楽だ」(p.44)「図書館に勤め始めたころはもちろん幼稚園からの喧騒をうるさいと思わなかったし、むしろ無邪気な可愛い声が聞けてうれしかった」「朝、空気の入替えのために閲覧スペースの前の窓を開き、裏の幼稚園の園児たちの笑いさざめく声が、ワッと図書館へ流れ込んでくると、胸が苦しくなり耳を塞ぎたくなった。子どもを作らなきゃ、でもその前に結婚しなきゃ、と焦りが極限に達して、次第に引いてゆく」「三十一歳。着々とタイムリミットが迫っている」(p.45)「のんびり屋の綾香は二十七歳のときに大学生のときから付き合っていた人と別れて以来、シングルとして穏やかに日々を送っていたのだが、三十を過ぎたあたりから急に不安になってきた」「図書館には毎日さまざまな京都在住の人々がひっきりなしに訪れるのに、だれと親密になるわけでもない。実家と職場の往復、たまにいつもの友達と遊んだり一人で目当てのスポットに出かける生活を続けていると、だれかと出会えるチャンスを見つけるのは難しいと、綾香は徐々に気づいてきた」(p.46)などと、描写されている。

結婚や出産に関心を寄せる綾香が、「妊娠出産に関する本は図書館に山ほどあったが、職

場でその関連の本を読むのは恥ずかしいので、市内の別の図書館まで出向き、借りられるだけ借りてむさぼり読んだ。結果、夜もよく眠れないほど焦る日々が続いた。彼氏はいらぬけど、子どもはほしい」(p.46)と感じたり、『五冊ですね。返却期限は七月二十九日です』新刊をいち早く予約して借りてゆく図書館をうまく利用している女性が、バーコードの読み込みが終わった本を手提げ袋にしまってゆく。目鼻立ちの小さい薄い顔立ちにショートカットの髪、細いボーダーの T シャツを着て左手にはシンプルな結婚指輪をはめていた。こんな大人しそうに見える女性にも結婚のチャンスがあったんだと思うと、彼女と自分のながが一体違うのか、綾香はつい考えてしまう」(pp.47-48) という場面もある。

その後、次女の羽依が勤める会社の社員で、三十九歳の宮尾俊樹を紹介され、交際を開始する。ふたりが、最初に会った日には、マンガ博物館へ出向き、「綾香が図書館員なので興味があるんじゃないかと宮尾が配慮してくれた結果だった。確かに小学校を丸ごと図書館にして、年代や出版社などを越えてあらゆるマンガを集めた開架書架は綾香の興味を引き、二人は思い思いのマンガを手にとって校舎前の芝生に座って読みふけた」(pp.109-110) という。

結婚や出産にあせりを感じる綾香の職場として、さまざまな人がやってくるが、親しくなる機会がなく、綾香自身も「呑気な職場」と考えている、図書館が選ばれている。図書館について、利用しているひとたちや館内での利用者の行動、職員のがわから見た利用者に対する意識、などが、図書館職員である綾香の視点で描かれている。

注

- 1) 綿矢りさ『手のひらの京』新潮社、2016.9
- 2) 新潮社 著者プロフィール「綿矢りさ」  
(<http://www.shinchosha.co.jp/writer/4465/>)
- 3) (<http://www.shinchosha.co.jp/book/332623/>)
- 4) 「“特別な街”での、故郷と家族の普遍の物語 『手のひらの京』綿矢りさ著 著者は語る」『週刊文春』2016.11.13  
(<http://shukan.bunshun.jp/articles/-/6751>)
- 5) 「著者インタビュー 綿矢りさ『手のひらの京』『サンデー毎日』2017.1.8-15 新春合併号  
(<http://mainichi.jp/articles/20161227/org/00m/040/060000c>)
- 6) (<http://www.shinchosha.co.jp/book/332623/>)
- 7) シナリオでは「建物は区立図書館。看板の字も読めないほど——見捨てられ、忘れられたオールドミスのように寒々とした姿で建っている」と描写されている。

向田邦子「女正月」『阿修羅のごとく 向田邦子 TV 作品集 1』大和書房、1981、p.9

NHK で 1979 年に放映されたドラマでのこのキャラクタについては、「滝子は、男っ気がまるでない生真面目な図書館司書。黒縁メガネでにこりともしない愛想の悪さ、理屈っぽさなど、華やかなイメージがあつたいしだあゆみさんからは、想像もつかない役柄だった」などと述べられている。

(<http://www.nhk.or.jp/archives/search/special/detail/?d=drama038>)

また、2003年に公開された、映画『阿修羅のごとく』について書かれた文章では、「まさにステレオタイプといえる。映像に表れる図書館の司書像」「滝子は、そのタイプから外れない」などと紹介されている。

『愛と勇気の図書館物語 第38話 阿修羅のごとく』(2013年7月)

(<http://www.mukogawa-u.ac.jp/~library/kancho/story38.html>)

8)京都市図書館は、中央・右京中央・醍醐中央・伏見中央の比較的規模の大きい4図書館と、15分館、移動図書館、により構成される。

京都市図書館は、1981年の京都市中央図書館開館以来、「京都市社会教育振興財団(現・京都市生涯学習振興財団)」への委託により運営され、財団職員の待遇は、正規の公務員とは異なっている。

([http://web.kyoto-inet.or.jp/org/asny1/asnydata/zaidan\\_enkaku.html](http://web.kyoto-inet.or.jp/org/asny1/asnydata/zaidan_enkaku.html))

2016年に募集された「京都市伏見中央図書館」の求人では、有期契約(更新あり)、月収:13万円、賞与なし、などとなっている。

(<http://hwsearch.me/kyujin/6407514>)

### 3-3. 大崎梢『本バスめぐりん。』東京創元社1)

大崎梢は、東京創元社のホームページで「東京都生まれ。神奈川県在住。2006年5月、連作短編集『配達あかずきん』でデビュー。元書店員ならではの目線と、優しい語り口、爽やかな読後感で注目を浴びる」2)と紹介されている。

『本バスめぐりん。』の執筆に至るプロセスと図書館への取材については、東京創元社のウェブマガジン『Webミステリーズ!』で、「新しい『本の現場』」を舞台としたストーリーとして、移動図書館を提案、横浜市図書館の「移動図書館・はまかぜ号」を取材したことがあかされている。3)著者インタビューでは、「横浜市にも移動図書館」があり、「同行取材」し、「移動図書館に積める本は3000冊」で「司書はバスが回るステーションの土地柄や人口構成、または季節や流行に合わせて本を選ぶ」4)などと語っている。『WEB本の雑誌』に掲載された、紹介文でも「移動図書館のシステムや貸し出される本について詳しく書かれている部分」が「本を愛する読者にとって興味深い内容」5)となっていることにふれている。

『本バスめぐりん。』では、「種川市」(架空の地名)で運用されている移動図書館でのやりとりが、ストーリーの中心となっている。

#### ○プロフィール

「照岡久志」は、サラリーマンとして定年まで勤め、嘱託で数年会社に残ったあとは、六十代半ばで、無職となって、時間を持て余していたが、元同級生の紹介で移動図書館の運転手として働くことになり、司書である「二十代半ばの若い女の子で、梅園菜緒子」(p.9)とともに、移動図書館での業務に対応することになる。

小説の舞台となる「種川市には現在、本館と呼ばれる中央図書館と分館を合わせて八つの市立図書館があり、他に「本を載せたマイクロバスが市内をまわっている」(p.11)「種

川市の移動図書館は本を載せたバス、通称『本バス』と呼ばれ、公募で決まった愛称は『めぐりん号』。市内十六カ所を二週間かけてぐるりと回る。火曜日から金曜日までの四日間、午後の時間に二、三カ所ずつで十六カ所だ。市民の側からすれば、二週間に一度の割合でバスがやってくる。車が駐まり、店開きよろしくカウンターなどが設置される『ステーション』は、図書館から離れたエリアの公園や公民館、大型マンションやスーパーなどの駐車場が多い」(p.13) という。6)

#### ○移動図書館とステーションでの対応

マイクロバスの「側面が上に開いて庇のように斜めに固定されている。ハッチと言えはいいのか、その下にびっしり並んでいるのが本の背表紙だ。車の内側も改造されている。向かい合わせで書棚が設えられ、そこにも本が詰まっている。およそ三千冊が載っている」「現地に到着次第、積んであった折りたたみ式の長机を降ろして返却や貸し出し用のカウンターを作ったり、業務用ノートパソコンやバーコードリーダーを置いたり、案内プレートを所定の位置に掲げたり、車内に入るための昇降ステップを用意したりと、やるべき作業はいろいろある」(p.8) とある。

「雨の日は巡回中止とばかり思っていた」が「中止になるのは台風の直撃や大雪に見舞われたときくらいだと言われた」「雨の中を出かけてみれば、公民館の軒先や公園の四阿で本バスの到着を待つ人がいる。傘を差して現れる人もいる。本にとって水は大敵なので、返却の本を持参した人は丁寧にビニールにくるんでいる」「車の店開きも側面のハッチ部分を雨よけでガードする。後部の出入り口にも収納式の軒がめいっぱい伸ばされる。ガーデン用の大きなパラソルを開き、貸し出しカウンターとなる長机をその下に収める」「かなりの雨脚になると側面を閉じて後部扉から返却とリクエストされた本の貸し出しだけ行う。急に降り出した雨でコンテナの収納が追いつかず、本を濡らすこともごくたまにある。手際の良さとスタッフ同士の連携がものを言う」(p.59) のように、天候に左右されることなく、市内を巡回している。

ステーションでは「世話役が数人いるので、手際よく準備が進む。大木になった桜の木があるので夏場は木陰ができて助かる。長机をそこに運び、貸し出しカウンターを作る。予約本を入れたコンテナも車から降ろし探しやすい場所に置く」「日の当たるところにはパラソルを広げた。季節のおすすめコーナーを設ける」(p.64) また、「最近では子どもたちが担う、専用の貸し出しカウンターも登場した。長テーブルの向こう側にエプロンをつけた小学生が立ち、バーコードリーダーを握る。貸し出しカードと預かった本のデータを読み取り、印字されたペーパーをちぎって渡す。大人がそばで見守っているので安心だ」(p.87) が、その場で、子どもの間でのいさかいに対応する小学生に「久志は舌を巻いてしまう。なんて気の利いたやりとりだろう。見習わなくてはならない」(p.88) と感じる。「学校帰りの小学生もやってくる。ネットからリクエストした本の受け取りだそうだ」(p.94) という利用のされ方もある。

市街地のステーションは、「いくつかの会社が隣接するワーキングエリア」にあり、「ここだけは一時間繰り上げて十二時前に出発する。働いている人たちが主な対象だからだ。

昼休みの半ば、十二時半の到着を目指す」「本棚の設営はあと回し。予約本を入れたコンテナをどんどん下ろし、長机を設置して大急ぎでカウンターを作る」「待ち構えている人で、あっという間に長蛇の列ができる。このステーションには職員もふたり増員され、別の車で到着し、久志と菜緒子を含めた四人体制でさばっていく」(pp.103-104) という。

#### ○移動図書館の本

『載せてる本だよ。巡回先によって梅園さんはラインナップを変えてるよね』『ああ、少しは。利用される方の嗜好やニーズに合わせたいと思うんですけど』という会話があり、「出発前の準備段階で彼女がただならぬ真剣な顔をしていることに気づいた」「改造された車の中に三千冊はずいぶんな数だと思うが、そもそも本の種類は膨大だ」「各ジャンルの主だったタイトルをそろえていだけで棚はたちまちぱんぱんだ。合間に、担当者である司書が自分のセレクトを差し込む。腕の見せ所なのだろう」(pp.36-37) と、久志は感じる。移動図書館の本は、『『まわる場所によって多少の入れ替えがあるんですよ』(p.75)「建物に収められた蔵書数からすれば遥かに少ないが、それでも三千冊だ。こまめに入れ替えられているので、触れられる本は数倍にもなる」(p.79)「本バスにはおよそ三千冊の本が積まれている。ひとりが一回に借りられる上限は六冊」「人の好みはほんとうに偏っている。本の種類は膨大だ」「ジャンルごとに見れば、置いてあるのは多くて数十冊。それでは少ないと言われてしまう。借りたい本が一冊もないと、これみよがしにため息をつかれるのは珍しくない」「本バスにはおのずと限界がある。図書館にある本をリクエストして受け取るとはできる。うまく使ってほしいと思うが、せっかく本を載せて訪問しているのだ。棚を見て、できれば思わぬ本との出会いを体験してほしい」「そのためにも重要なのは本の取捨選択であり、責任を負う司書たちは三千冊にくまなく目を光らせている」「ほんとうの話題作は引く手あまたとなり棚に置くことはできないが、似たような本、目先を変えたアプローチは蔵書の中から用意できる」「予約が殺到するような本は手も足も出ないが、同じ著者の別の本を棚に並べることはできる。常に創意工夫がものを言う」「定期的に入れ替えて、リピーターを飽きさせないよう努めている」(pp.161-162) というように、移動図書館のマイクロバスに載せる本について、職員の配慮が行き届いていることが明らかにされている。

#### ○司書のイメージ

元同級生からは『『本に詳しいのは司書だ。資格を持った職員がメイン』(p.28) と言われていたが、「司書と言われ久志が真っ先にイメージしたのは、眼鏡をかけた文学少女だった。学則に則った制服を身につけ、学校の中庭に置かれたベンチにひとり腰かけ本を読む女の子。生真面目で色白で、口数は少なく、スリリングな魅力を備えている」というものだった。実際に移動図書館でともに働くことになった司書の梅園菜緒子については「現れたのは放課後のグラウンドを威勢よく走りまわっているような運動部女子そのものだった。はきはき物をしゃべり、笑うときはためらいもなく口を開けて笑い、考えていることを素直に顔に出す。リアクションも大きい。図書館に出入りするようになってわかったことだが、司書は外見も中身もまちまちでとてもひと口では語れない」(p.16) としている。

おりにふれて、久志は司書の菜緒子について「思いつくまま走りまわる方が得意な子だ。

図書館司書が果たして適職かと、思わないでもないが、どんな職業でも人間関係からは離れられない」(p.88)「デリケートとかセンシティブとか、心の機微を表す言葉を彼女の辞書に波線つきで書き込んでやりたい」(p.157)と感じている。

#### ○利用者との対話

久志は、年配の女性に、上にある本を取ってほしいとたのまれ、手渡すと字が小さくて読めないと言われたので、元の場所に戻し、『『また取ってほしいのがあったら言ってください』笑みを浮かべ声をかける。我ながら模範的な正しい応対だと満足するも、相手の表情は硬く、司書の「二十代半ばの若い女の子で、梅園菜緒子」が、その利用者にも声をかけ『『茶道の本をお探しですか』と女性に尋ね』て、事情を聴いたうえで、『『でしたら、まずは柔らかそうなものから読まれてはいかがですか？』「車の反対側へと誘った。女性は満足気にうなずき、晴れやかな顔でくっついていく」(pp.9-10)という展開になる。

久志は『『わからない』で片づけるのも抵抗があった。それを理由にするとこれから先、移動図書館の運転手をしている間中、多くの物事を右から左に流し続けなくてはならない』「知らない物を知らない人たちにとどけるだけの人間で、いいのだろうか」(p.34)と感じて、その後は、「ゴルフ場のガイドブックも見たいと言われ、さっそく業務用パソコンで検索した。それらしい本を選んでもらい予約を入れる。二週間後には持ってこられそうだ」(p.41)という対応もしている。

「問い合わせや相談を受け、参考になりそうな本を見繕って用意するのがレファレンス業務」(p.88)と、菜緒子が、久志に語っている場面もある。

#### ○出版流通と図書館

現実には、図書館での貸し出しにより、図書の販売が影響を受けているという件については、2016年にも、多くのメディアで報道されてきている。7)

『本バスめぐりん。』では、図書館職員で司書の「菜緒子はすかさず本を買うようにすすめた。気に入った本を買って手元に置いたり、最良する作家の新刊をいち早く購入することで、誰でも出版界に貢献できる。誰かが支えなくては、新しい本は作れなくなる。図書館の棚も痩せ細ってしまう」と言うので、言われた利用者の方は「意外な言葉だったらしく、目を白黒させていた。図書館員に本の購入をすすめられるとは思っていなかったのだ」『『いっぱい借りて、いっぱい買って、いっぱい読む、これですよ。私も買ってますから。本屋さん、大好きですし』』という発言に、利用者の方も納得して『『なるほど』とうなずいている」(pp.121-122)。また、図書館で行われた講演会の後、「一階には講師を務めた作家の著作コーナーが設けられていたが、展示されていたほとんどがなくなっていた。興味を持って借りていった人がたくさんいたのだろう。その中から町の書店で新刊を買う人が現れたら、売れ行きにも貢献できる。図書館は無料で本を貸し出すだけじゃないと、いつだったか菜緒子が力を込めて言っていた」(p.126)と、久志が回想している場面がある。

大崎梢は、書店勤務の経験があり、さらに書店や出版流通の現場を作品に描いてきた作家でもある。今回は、移動図書館を題材に取り上げ、その周辺も含めて取材していると思われるが、ここで描かれている図書館員は、「出版界が期待する図書館員像」になっている

ように思われる。

#### ○利用者のプライバシーに関して

「利用者のプライベートを穿鑿するなど図書館員にあるまじき行為だと、久志も菜緒子もわかっている。職員でなくても人として品がない。わかっているのだけれども、彼女の一举一動について考えずにはいられない」(p.22)『ダメですね。司書がそんな、利用者を穿鑿するようなこと』(p.118)とあるように、利用者のプライバシーに対する配慮が必要なことはくりかえし強調されているが、ストーリーの展開上やむをえないところもある。

たとえば、中学生の女子の利用者で、「とても綺麗な顔立ちをしていた」「大きな瞳も長い睫毛も細い鼻筋も小さな口元も、清らかで可憐だ。髪型や着ている服は地味なので、造作の良さがいっそう際立つ」(p.158)という人物が登場する。貸し出しカードを申請して本を借りていくと『今日、借りていったのは定番の児童文学が数冊と、古い映画についてのエッセイ集と、野山の写真集と、ドラマのノベライズ本でした』『リピーターになってくれるなら、あの子に合わせた本も選んで載せたいです』(p.167)と、菜緒子が、久志に話している。図書館職員同士の内輪の話ならまだしも、同じステーションの利用者があれこれと世話を焼こうとすることについては、「構いすぎではいけない。そっとしておいた方がいい場合もある」(p.169)と、久志は感じている。

ある日、女の子が借りていた本を返却しただけで、借りていかなかったことがあり、久志は、他の利用者から、「何を借りていたのかと尋ねられる。利用者のプライバシーなのでおいそれとは明かせない。久志が困っていると、ポニーテールの主婦が『知っている』と言い出した。『先々週、借りる時に一緒に並んでいたんです。だからなんとなく見えて。特別な本はなかったと思いますよ。小説とエッセイとお料理の本、あとは犬の写真集とか』(p.173)とあるように、女の子が借りていた本については、図書館員ではなく、他の利用者が見て覚えていた、という展開になっている。

#### ○住宅街の活性化と図書館

「利用者が突然来なくなるのは、どこのステーションでもよくあることだそう。来る者は拒まず、去る者は追わず。公共図書館の基本サービスだ」(p.126)「関わり方は深くなるのも浅くなるのも自由自在、というのが公立図書館の良さだろう」(p.128)（公共・公立の表記は原文どおり）というのは原則だが、利用の減少はステーションの存続にかかわる問題となる。

市内の大手建設会社が開発した分譲地「殿ヶ丘」では、『交通の便のいいところに若い人が転居し、大きな家にいるのはお年を召した方たち』『人生と同じように住宅地も晩年を迎えるのか』(p.58)という状態になっている。「図書館では運営についての全体会議が毎月開かれ、正規職員である菜緒子も出席する。移動図書館の活動報告や意見交換などが行われ、半年に一度くらいの割合でステーションの見直しが話し合われる。利用者の少ないところを廃止し、多くを見込めそうなところに新たに設けられる。それだけ聞けばもっともな話だと思う」巡回日を増やすのは「経費的に見ても、車への負担を考慮しても難しい。二台にするのはもっと難しい」「訪問先の検討が前向きな対応だ。じっさい来てほしいとい

う要望が舞い込むらしい。応えるには利用の減っている場所を削るしかない。今の十六カ所はぎりぎりの数だ」(p.60)という状況である。

殿ヶ丘は、どの図書館にも遠く、図書館をつくる計画はあったが予算の関係で設置されず、移動図書館の利用は減少している。この地区では、住宅街の住民が減り、さまざまなものが撤退した商店街ではシャッターの下りた店もふえている。このような状況下で、保育園の子どもたちが移動図書館にやってくるようになれば利用も増え、にぎわうのではないかと、という案が出される。しかし、二十年前、町内会が猛反対し、保育園はできたものの「子どもたちの野外活動を制限した約束事」(p.72)があり、保育園の園児の利用を認めていなかった。保育園からは「『二週間に一度、移動図書館が来るときだけは、子どもたちを連れて行きたい』と要望が出されたが、町内会では「図書館は静かに利用するという暗黙のルールがある」「移動図書館だって守られてしかるべき。就学前の小さな子どもたちが走りまわったり、金切り声をあげる中では本を選べない」「移動図書館を実現させたのは殿ヶ丘の粘り強い働きかけがあればこそ、努力が実を結び、ステーション開設にもこぎつけた。安易な横入りはご遠慮いただきたい」(p.78)という理由で断っている。

そこで、まず、保育園の子どもたちが楽しそうに利用している、市内の他のステーションを見学することになる。「児童公園の中」で「本バスの到着に合わせていくつかのサークルが集まる」「フリーマーケットでも開かれているのかと思ったくらい」「年配の人が多いが、若い人たちも賑やかに交じっている」「公民館がリニューアルされ、精力的に各種の教室が開かれた」「本バスも活動にひと役買っている」「二週間に一度やってきて公園内にしばらく滞在するので、集まる目安にちょうどいいそうだ」(p.82)そこは「十六あるステーションの中でも、特殊な部類であることはまちがいない」(p.83)「持参したゴザを敷き絵本の箱を並べ、ときには紙芝居や紙人形劇(ペープサート)の用意もして子どもコーナーを作り上げる」(p.84)という状況で、朗読会の人たちが手伝ってくれている。しかし、その朗読会も空中分解しかけたこともあり、人間関係までこじれかけたが、粘り強く話し合いを続け、危機を乗り越えてきた。「コーナーに歴史あり」(p.85)だ、ということがあかされる。

こうした他のステーションでの対応を参考にして、「今のままでいたら寂れていくだけだ。どんどん不便になっていく」「衰退を止めるにはどうすればいいのか。変えるにはどうすればいいのか。何が足りなくて、何が過剰だったのか。鍵を握っているのは案外、保育園じゃないか」(p.91)「月例会で殿ヶ丘住宅街の新しい取り組みと意気込みを報告し、ステーションの存続を訴えた。すると、『人口減少に悩む町の再生』という図書館の域を超えたテーマにみんな喰い付き、活発な意見が飛び交った」(p.98)ということで、保育園へ申し入れ、園児の利用が認められることになる。

ストーリーの後半では、「商店街の空き店舗を利用したカフェも始まっている。コミュニケーションスペースとして読書や編み物など自由に使えるらしい。最近では店舗の一、二階を使った自習室を計画している。中央図書館にも勉強ができるようなデスクコーナーが設けられているのだがとても足りない。朝早くから並んで席取りに苦勞する。そんな話を

聞きつけ、日中でも静かな住宅街に机を用意してはと勘案されたのだ。今流行のワーキングスペースとしても利用可能だ」(p.234)という状況になっていることが紹介されている。

#### ○イベント参加

「今まで図書館を利用したことのない人に足を運んでもらうのは、どんなイベントにせよ簡単ではない。新たな利用者の掘り起こしに、なかなかつながらない。それこそ昨今の大きな課題」であり、「住民の税金で成り立っている図書館は、常に利用者の増減を意識している。増えれば予算の増額が期待できる。パート職員の勤務時間も増やせるし建物の補修も叶う。本も買える。けれど減ってしまえば、たちまち他部署との攻防戦に黄色信号が灯る。苦戦の果てに減額されれば少ない予算の中でやりくりしなくてはならない」(p.204)

「利用者を待つだけではなく」こちらから出向いていく方法が、会議で話し合わせ、「司書は市中の学校を訪ね、図書室に置く本の選書に関わっている。建物の外での活動はあるのだが対象は限られている。もっと広く、フットワーク良く、という観点で浮上したのが移動図書館、本バスめぐりん号」で、「市民祭り」という「他部署の主催する市民行事に送り込めば、自然と多くの人目に留まる。図書館というものの存在をアピールできる。しかも、かかる経費は職員たちへの時間外手当と本バスのガソリン代くらい」(p.205)ということから、企画書をだし、事前審査を受けたあと、「本バスの市民祭り参加が正式に決まる。「目標は認知度アップと新たな利用者の掘り起こし」であり、めぐりん号だけでなく「市内各地に建っている図書館すべてが対象」で、「知ってもらう。来てもらう。借りてもらう。この三点のアピール」(p.208)をしようということになる。

#### ○匿名のクレーム葉書

移動図書館の「運転手が特定の利用者、それも女性と親しくしすぎている」(p.218)とのクレーム葉書が届いていることを聞き、久志は「いやでも声が掠れる。胸の鼓動が一気に速まり、とくとくとうるさいほどだ。頭に血が上る」(p.218)という状態になる。差出人の住所や名前は書かれていないし、どこのステーションの利用者かもわからない。久志は、身に覚えがないが、「何を言われても言葉は出てこない。思わず頭を抱え込んだ。情けないことに、とてもショックだった」「辛辣な言葉を浴びせかけられて、動揺せずにはいられない」「頑張ればなんとかなると思っていた。そのなんとかに必要なのは、仕事の手際だけでなく、新たに出会う人人との信頼の輪だったと、今にして痛感する」「サラリーマン人生では味わったことのない感覚」「まるで自分の人格が否定されるような思い」であり、今の仕事は、「境界線があいまいで、丸裸の自分を査定されているような気がする。それが怖い。ぞっとする」(pp.223-224)という状況になるが、やがて、葉書の文面から、最近の利用に関するクレームではないことが判明する。

久志は「匿名の葉書を鵜呑みにしない人たちがいる、というのを実感できて、また頑張ろうと思える」(p.246)「ついこの前、今の仕事は会社勤めと異なり、自分自身があらわになってしまおうと感じ」た。運転手としての研修はあったが、「それ以外は指導や指示は大ざっぱで、マニュアルもなく、その場その場での臨機応変が求められた」「任される部分が大

大きく、自由度は高い。そうなれば自分のペースでのびのびやればいいのだけれど、対する相手はいつも生身の個人だ。それぞれの思いを持っている。こちら巻き込まれたり、降りまわされたりは至し方のないことだった」「公共施設の職員と市民のひとり。住まい近くまで分け入って、本というプライバシーに関わるもののやりとりをする。仕事の性質がまったくちがっていたのだ」(p.252)と感じている。ストーリーの後半では「大きなミスも犯さず一年目を乗り切った。1週間で十六カ所のステーションを回るというサイクルにも慣れ、仕事も手際も向上し、利用者の顔と名前もだいぶ覚えた」(p.203)という状態になっていることが示される。

注

1)大崎梢『本バスめぐりん。』東京創元社、2016.11

2) (<http://www.tsogen.co.jp/np/isbn/9784488027674>)

3)「本に携わる仕事を真摯に丁寧描いてきた大崎さん。デビュー10周年を迎えるにあたり、新しい『本の現場』を読みたいと思ったのです。舞台をどこに設定するか、打ち合わせを重ねる中で『移動図書館の話はどうかしら』と提案いただきました。どんと佇む図書館ではなく、利用者の住まいの近くまで身軽に本を届けるちょっと変わった図書館を、大崎さんが描かれたらどんなお話になるんだろう。わくわくして、すぐに連載の準備をお願いしました」「連載の前に、横浜市立図書館にご協力いただきました。移動図書館・はまかぜ号を見せてもらったのです。中央図書館でははまかぜ号の出発を見守ったり、貸出業務が行われている巡回先にくっついて行ったり……。現場で実際に働く方からの『こういうとき嬉しい』『あれが困った』などのエピソードは新しい発見ばかり。取材日はあいにくの雨天でしたが、そんなことで出発しない、なんてことはありません。本を借りに返しに、待っている人がたくさんいるのですから。この貴重な経験は本文にぞんぶんに活かさせていただきますので、どうぞお楽しみに」

(<http://www.webmysteries.jp/topic/1611-05html>)

4)「著者インタビュー 大崎梢『本バスめぐりん。』『サンデー毎日』2017.1.17

「バスに本を積んで、地域を巡回するものです。移動図書館が舞台となったミステリーには、イアン・サンソムの『蔵書まるごと消失事件』がありますが、日本ではまだなかった。それで興味を持って、調べてみました。田舎をのんびり走るイメージだったんですが、じつは横浜市にも移動図書館があった。その本バスに同行取材させてもらうことから、この作品が生まれたんです」「取材してみて、普通の図書館との違いがよく分かりました。移動図書館に積める本は3000冊ほど。多いように思えますが、ジャンルごとの冊数は限られています。司書はバスが回るステーションの土地柄や人口構成、または季節や流行に合わせて本を選ぶんです」「移動図書館は人が暮らすコミュニティに入っていくので、顔見知りになるし会話も生まれやすい。回る先が住宅街か団地か、あるいはビジネス街かによって、ステーションの雰囲気もずいぶん違ってきます」「社会人になると、テリトリーも人間関係もひとつになってしまいがちです。でも、移動図書館には世代も仕事も違う人たちが集まってくる。取材したときも、バスのそばで世間話をする姿が見られました。図書館という

コミュニティー、そういうつながりがあってもいいですね」「本好きなので、本の出てる小説は書いていて楽しいですね（笑）。いまは電子書籍もありますが、書店や図書館のように本が並ぶ中から一冊の本を選ぶ楽しさを失いたくはないです。手にとって見て触って、知らない本に出会う楽しみは、たくさんの本が並んでいるからこそです」

(<http://mainichi.jp/articles/20170117/org/00m/040/020000c>)

なお、この発言の中で、紹介されているものは、下記。

イアン・サンソム著、玉木亨訳『蔵書まるごと消失事件』東京創元社（創元推理文庫）、2010.2

5)「移動図書館の日常ミステリー 大崎梢『本バスめぐりん。』」文：松井ゆかり【今週はこれを読め！ エンタメ編】『WEB本の雑誌』

(<http://www.webdoku.jp/newshz/matsui/2017/01/18/155103.html>)

「ミステリーとしてのおもしろさはもちろんなのだが、移動図書館のシステムや貸し出される本について詳しく書かれている部分というのがまた、本を愛する読者にとって興味深い内容となっている。自身も書店勤務の経験がある著者の大崎梢氏が、これまでも書店や出版社を舞台とした作品を多く発表されていることについてはよくご存じの読者も多いだろう。そんな著者が新たに描き出したのが（移動）図書館という場だ」

6)種川市は、架空の地名だが、「横浜に隣接」（p.12）という設定になっている。横浜市に隣接していて、移動図書館を運営している自治体としては、川崎市（1台）、町田市（3台）がある。

7)たとえば、以下のような、記事がある。

「図書館で売れ筋の新刊本を貸し出すタイミングは？」『産経ニュース』2016.1.24

(<http://www.sankei.com/premium/news/160124/prm1601240023-n1.html>)

上記の記事では、『『出版事業の維持に協力を』新潮社常務 石井昂氏』『『蔵書方針は尊重すべきだ』日本図書館協会理事長 森茜氏』の両者に対するインタビューを掲載している。

「貸し出し猶予、『主張に矛盾』 図書館側が反発『本売れぬ要因は他に』 図書館考」『朝日新聞』2016.2.17（朝刊）、p.35

「新刊めぐり図書館と対立 活字文化維持へ共闘の動きも 本屋のない街・下」『朝日新聞』2016.3.1（朝刊）、p.31

## 5. おわりに

本稿の「1. はじめに」でふれたように、日本図書館協会から、「自治体総合計画における図書館政策の位置づけについて」を調査した結果が公表され、図書館を核とした地域の活性化策を検討している自治体が多数にのぼっていることが明らかになった。こうした試みのモデルケースとしては、紫波町（岩手県）の例があり、すでに多数のメディアで報道されている。1)

一方、CCCの運営する図書館には、批判も多いが、たとえば、百貨店が経営上の問題か

ら撤退し、閉店した跡地に、CCC が運営する「T-SITE」が出店し、多くの来訪者を集めていることが、紹介されている。2)この記事でとりあげられている、枚方市駅前の建物には、図書館は入っていないが、CCC の手法による、百貨店撤退後の施設活用について、注目が集まっている。同様のケースで、南砺市立中央図書館（富山県）、徳島市立中央図書館、島田市立島田図書館（静岡県）、茂原市立図書館（千葉県）などは、駅前の商業ビルに、テナント撤退後、図書館が入っている事例である。また、玉野市立図書館（岡山県）が、「市内最大のショッピングセンター・メルカ」に移転して、2017 年に開館予定であることが、報じられている。3)

図書館の施設や運営のあり方が多様化していく中で、フィクションの作品における図書館のイメージは、変わらない部分もあるが、4)今回紹介した映画の事例では、「場」としての図書館（『君の名は。』『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』）、レファレンスサービス（『海すずめ』『天使のいる図書館』）などにもスポットがあてられている。小説の事例では、大規模な地域活性化とは言えないが、移動図書館を扱った『本バスめぐりん。』では、住宅街の居住者が高齢化し、周辺の商店街からも撤退が相次ぐ移動図書館のステーションで、にぎわいをとりもどそうとする試みや、市のイベントに移動図書館が参加することで、その市の図書館の存在を、現在、図書館を使っていない人たちにもアピールしていこうとする様子が描かれている。

職員体制について、正規専門職員の配置がきびしくなっている実態を反映したストーリーは、これまでもあったが、今回とりあげた作品でも扱われている。その中で、資料費や職員配置に要する経費の配分について、利用状況が反映される、との描写が見られたが、実際には、公共図書館全体の資料費や正規専門職員配置は、1990 年代末をピークに、減額・削減が続いており、図書館からの個人貸出点数は、2011 年までは増加していたことから、「利用が増えても、資源投入は減少していく」状況がつづいてきていたといえる。5)2012 年以降、貸出点数は微減が続き、個々の図書館を見れば、該当しないケースもあるが、最近 5 年間は、資料費・正規専門職員数・貸出点数のいずれもが減少している状態にある。一方、日本図書館協会の機関誌『図書館雑誌』には、2016 年度の図書館大会記念講演で、「図書館がこの間貸出冊数を伸ばすことを重視してきた」ことに対して、疑問視する発言があったことが紹介されている。6)

公共図書館の運営形態に関しては、指定管理者導入の見直しが示唆されているとの報道もあったが、7)2016 年に文庫化された、桜木紫乃『無垢の領域』は、図書館の運営形態が多様化している状況を反映した小説として、市立釧路図書館を舞台とした事例であり、受託企業の図書館長がメインキャラクターの一人となっている。8)なお、この市立釧路図書館については、移転して新しい施設に移行するのに伴い、新たな指定管理者が設定されたことが報じられている。9)

今回はふれなかったが、「d マガジン」「楽天マガジン」に代表される、雑誌読み放題サービスや、多くの問題点が指摘された「Kindle Unlimited（キンドル アンリミテッド）」など、スマートフォンやタブレット端末で、雑誌や図書を読む機会を提供する、個人向けの

定額サービスが、一定数の会員を獲得している。10)個人が、文字情報にふれる媒体の変化、といえるこの現象は、公共図書館で扱われる資料についても、影響を与えることになると思われる。

図書館をとりまく環境が、さまざまな局面で多様化していく中で、その状況の一端はフィクションの作品にも描かれるようになってきており、今後の動向を注視していきたい。

注

1)「図書館と地方自治は互いにもっと理解し合わなければならない」と冒頭に記述されている、この領域の専門家2人による著作が、刊行されている。

片山善博、糸賀雅児『地方自治と図書館 「知の地域づくり」を地域再生の切り札に』勁草書房、2016.12

なお、下記の著作では、紫波町の「オガールプロジェクト」にかかわった多数の人々に取材し、その全貌を紹介している。

猪谷千香『まちの未来をこの手でつくる 紫波町オガールプロジェクト』幻冬舎、2016.9  
また、NHKでも、下記の番組などで紹介された。

「地方から日本を変える① まちを潤す“にぎわい革命”」『クローズアップ現代』2015.1.5  
([http://www.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail\\_3594.html](http://www.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail_3594.html))

2)「地方百貨店、大量閉店時代の救世主は？ 経営者が口々に挙げる商業施設」『日経ビジネス ON LINE』2016.11.4

(<http://trendy.nikkeibp.co.jp/aycl/column/16/090200078/110100052/?rt=nocnt>)

3)「玉野市立図書館が市内最大のショッピングセンター・メルカ（同市宇野）に移転することが30日、決まった」と報じられた。

「玉野市立図書館のメルカ移転決定 市議会可決、17年3月開館予定」『山陽新聞』2015.1.30

(<http://www.sanyonews.jp/article/128000>)

その後、「4月1日に全面オープン」の予定であることが、明らかにされた。

「メルカ 玉野の商業施設、4月リニューアル 市立図書館移転入居 岡山」『毎日新聞』（地方版）、2016.2.18

(<http://mainichi.jp/articles/20170218/ddl/k33/020/555000c>)

4)たとえば、本誌の前号で取り上げた、テレビドラマ『偽装の夫婦』では、図書館に勤める女性の住んでいる部屋の床が、所持する本の重みで抜けるストーリーになっていた。

佐藤毅彦「2015年—図書館をめぐるメディアでの扱いとテレビドラマ『偽装の夫婦』」『甲南国文』vol.63、2016.3、pp.1-14

5)「日本の図書館統計」日本図書館協会

(<http://www.jla.or.jp/library/statistics/tabid/94/Default.aspx>)

6)『図書館雑誌』vol.111、no.1、2017.1、には、2016年10月16日、青山学院大学で開催された、「平成28年度（第102回）全国図書館大会ハイライト」が掲載されている。この中で、記念講演「地域創造と図書館の未来—わたしたちが継ぐもの—」株式会社マナビノ

タネ代表取締役森田秀之、の内容が、下記の記事で紹介されている。そこでは、『『公共サービスの本質とは、国民皆から税金を取り、自立できない一部の人、支援が必要な特定の人を助けるという不公平な事業を行うこと』である。そう考えたときに、図書館がこの間貸出冊数を伸ばすことを重視してきた考え方は、公共サービスの本来のあり方と本質のところと異なるものがあるともいえる』との発言があったことが紹介されている。

西野和夫「地域創造と図書館の未来」『図書館雑誌』vol.111、no.1、2017.1、pp16-17

7)松岡要『『トップランナー方式』を見送り 高市総務相 指定管理図書館を容認しないと表明』『出版ニュース』2017.1 上・中旬号、pp.6-10

また、下記の記事では、「高市総務相は 2016 年 11 月 25 日開催の第 19 回経済財政諮問会議において、図書館管理経費についての地方交付税積算の『トップランナー方式』を見送ると表明した」と報じられた。

「図書館界ウォッチング 14」『出版ニュース』2017.1 上・中旬号、pp.66-67

8)桜木紫乃『無垢の領域』新潮社（新潮文庫）、2016.1←新潮社、2013.7

9)「釧路の新市立図書館の指定管理者、地元の文化財団に」『日本経済新聞 電子版』2016.11.12

(<http://www.nikkei.com/article/DGXLZO09448250R11C16A1L41000/>)

なお、実際に「35歳の時にTRCに」よって「市立釧路図書館の館長として配属」され、「14年4月からは苫小牧市立中央図書館長」となっている、菅野耕一館長にインタビューした記事が、下記に発表されている。

「低コスト・高サービスという矛盾する運営課題が最も先鋭化する指定管理業務の現場——町おこしの中核か？ 資料提供のみか？ ～図書館の相反する2つの見通し」『図書新聞』2015.10.24、No.3227

10)「アマゾン、電子書籍読み放題へ 月額1000円前後」『朝日新聞』2016.6.28、p.1

サービス開始後、複数の出版社の本が、サービスからはずされる現象が生じた。

「電子書籍、主導できぬ出版社 アマゾン、読み放題から人気本を除外」『朝日新聞』2016.12.21、p.34

(本文中で参照したwebページは、2017年2月の時点で公開されていたものです)